





# 目次

よくある混乱 フランツ・カフカ .....	1
-----------------------	---



## よくある混乱 フランツ・カフカ

よくある出来事。よくある混乱に対する彼の忍耐。Aには、HにいるBと結ばなければならない重要な商談がある。彼は、下打ちあわせのため、Hに出向き、その往復をわずか十分で終えて、自宅でこの特別の迅速さを自慢する。翌日、Aは再びHに向かう。今度は、最終的な商談の締結のために。あらかじめ何時間もかかると見込んだAは、早朝に屋敷を出る。しかし、少なくとも、一見したところ、あらゆる付帯状況は前日と何も変わらないのに、今度はHに辿り着くのに十時間を要する。疲れ切って、夕刻、そこに到着すると、Aが来ないことに業を煮やしたBは、半時間前、Aの村に向かって出立して、あなた方は、途中のどこかで行き中っているはずですよ、教えられる。待った方がよいですよ、彼は諭される。しかし、Aは、商談の不安もあり、すぐに腰を浮かせると、自宅に引き返す。

今度は、特にそのことを意識した訳でもないのに、ほとんど一瞬で、その道のりを踏破する。Aは、Bがすでにかなり前から――Aの外出の直後から――やってきていて、それどころか、玄関先ではAとすれ違って、Bはそこで商談のことをAに思い起こさせたが、時間がありません、今は急がねばならないのですよ、Aは答えたよ、屋敷で聞かされる。

しかし、Bは、Aのこの不可解な態度にも関わらず、まだAを待つために、この屋敷ににいるという。それどころか、もう何度も、まだAは戻っていないのかと問い質して、依然として、上の階のAの部屋に陣取っていると。Aは、今なおBに申し開きをして、全てを詳らかにできるのを喜びながら、階段を駆け上がり、その上の階に足を踏み入れる。と、その瞬間、Aは、躓き、肉離れを起こして、痛みの余り、失神しそうになる。叫び声すら出せず、闇の中で悶絶しながら、ただ周囲の物音から、次のことを伺い知る。つまり、怒り心頭に達したBが――それが、はるか遠くか、すぐ傍らでのことか、判然としないが――、階段を踏み鳴らしながら、永遠にいなくなったという、そのことを。

---

よくある混乱 フランツ・カフカ

---

著 bambus

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---